俺は、君のためにこそ死ににいく

2007(平成19)年3月27日鑑賞〈東映試写室〉 ★★★★★

監督＝新城卓／製作総指揮・脚本＝石原慎太郎／出演＝岸惠子／徳重聡／窪塚洋介／筒井道隆／前川泰之／中村友也／多部未華子／遠藤憲一／勝野洋／石橋蓮司／中越典子／寺田農／桜井幸子／江守徹／戸田菜穂／宮崎美子／的場浩司／長門裕之／伊武雅刀（東映配給／2006年日本映画／140分）

……特攻隊、知覧、鳥濱トメをキーワードとして、石原慎太郎が脚本を書き、製作総指揮をしたこの映画は、『男たちの大和／YAMATO』（05年）に続いて多くの若者たちに観てもらいたいもの。『ホタル』（01年）で描かれた有名な逸話を含め、トメを慕った特攻隊員たちの青春群像は涙なくして観られないものばかり。平和で豊かな今の時代だからこそ、あの戦争と特攻の悲劇に思いを馳せ、トメがなぜ「特攻の母」と呼ばれたのか、そしてなぜ知覧特攻平和会館の建設に情熱を燃やし続けたのかについて、じっくりと考えたいものだ。

『ホタル』の感動を再び……

高倉健主演の『ホタル』（01年）は、特攻隊、知覧、鳥濱トメをキーワードとして描いた感動作で、2001年6月2日に涙でハンカチをグシャグシャにしながら観たもの（『シネマルーム2』36頁参照）。『ホタル』というタイトルは、特攻隊として散っていく隊員が「きっとホタルになってここに戻ってくる」と宣言したとおり、任務完了後、トメの前にホタルとなって現れたというお話からつけられたもの。

『ホタル』では、「特攻の母」と慕われたトメを奈良岡朋子が演じたが、『俺は、君のためにこそ死ににいく』では岸惠子が演じている。『ホタル』では、高倉健と田中裕子が主役としてストーリーの流れをつくっていたが、『俺は、君のため

にこそ死ににいく』では、トメを軸とした多くの特攻隊員たちの青春群像劇としているため、『ホタル』以上にトメの存在感が大きくなっている。このように、視点の違いはあるものの、特攻隊、知覧、鳥濱トメをキーワードとした『ホタル』の感動を再び……。

2匹目のどじょうは……？

総製作費26億円をかけた『男たちの大和／YAMATO』（05年）は興行収入51億円をあげる大ヒットとなったが、特筆すべきはこの映画を多くの若者たちが観たこと。戦前生まれの人たちや私たち団塊の世代は、当然こういう映画に興味を持っているが、若者たちが日本でつくられた戦争映画にはほとんど興味を示さない傾向が続く中、この『男たちの大和／YAMATO』だけは例外となった。その理由は、①反町隆史、中村獅童らの主役陣、②実物大でつくられた戦艦大和の話題、そして③長渕剛が歌った主題曲……？　もっともその後、回天を描いた佐々部清監督の『出口のない海』（06年）が興行的にパッとしなかったうえ、若者たちがほとんど観ていないのは残念……。

さて、東映が『男たちの大和／YAMATO』に続いて総製作費18億円をかけて、

©2007「俺は、君のためにこそ死ににいく」製作委員会

特攻隊員として散っていった若者たちとトメの姿を描いたこの『俺は、君のためにこそ死ににいく』が、「すべての国民に捧げられた」と言えるにふさわしい大ヒットとなるだろうか……？　ゴールデンウィーク明けの５月12日、全国一斉拡大ロードショーに注目したい。

石原節は……？

2007年４月８日の投票日に向けて、石原慎太郎氏は現在東京都知事選挙を闘っているが、『俺は、君のためにこそ死ににいく』の製作総指揮をとり、脚本を書いたのはその石原氏。衆議院議員時代の石原氏は、故中川一郎氏らと共に「青嵐会」に所属し、タカ派の代表と目されていた。しかし、1999年に東京都知事に就任してからは、その色彩を隠しはしないものの、都知事として独自の政策と戦略を打ち出し、さまざまな成果をあげてきた。もちろん批判も多いが、そのこと自体は衆目の一致するところ……？

しかし、３期目にチャレンジともなると、さすがに有力対立候補の浅野史郎氏らから都政の私物化・側近政治等々と批判され、防戦に大わらわ……。私は石原氏の政治姿勢は嫌いではなく、むしろ好きな方だが、やはり知事職は２期限りで辞めた方がいいと考えている。それは、誰だって３期目となると多選の弊害が出る可能性が高いため……。

それはともかく、そんな石原氏の製作総指揮・脚本による本作品には、どんな視点と主張がとり入れられているのだろうか……？　そのように期待した人は、この映画を観て意外に思われるかもしれない。なぜなら、この映画にはそれほど明確な「石原節」は織り込まれていないから……？　さて、その点をあなたはどのように評価する……？

主役級は４人……

私にとっては、この映画に登場する脇役の年配の俳優たちの名前は知っていても、特攻隊員となる若者たちについては、板東少尉を演じた窪塚洋介以外はほとんどその顔と名前を知らない俳優ばかり。それはこの映画が、『男たちの大和／YAMATO』のように、俳優の知名度で売ろうとしなかったため……？

したがって、この映画の主役はトメ１人で、あとの特攻隊員の若者たちはすべて対等に扱っている感じ。あえて言えば、主役級は中西正也少尉（徳重聡）、板東勝次少尉、田端紘一少尉（筒井道隆）、金山少尉（前川泰之）の４人だが、それは、彼らの物語を少し膨らませたため。さて、その４つの物語とは……？

その１、中西少尉をめぐる物語

この映画は、特攻という統一テーマの中で描かれる昭和20年という時代状況下での青春群像劇だから、その１つ１つの物語はあなた自身の目で観てもらいたい。しかし前述のように、この映画はスターの顔で売るものではないし、全員似たような特攻服を着ているため、少し整理しておかなければ１つ１つの物語が分かりにくい面もある。そこで、主役級４人をめぐる物語のポイントだけ少し整理しておこう。

まず、中西少尉は、単純（純粋）といえば単純（純粋）、そしてもっとも軍人らしい軍人……？　したがって彼の主張や生きざまは最も単純（純粋）だが、面白いのは、特攻前の空中戦で撃ち落とされたにもかかわらず、彼だけが生き残ったこと。そんな彼がおりなす物語は、第１に鶴田一枝（中越典子）との恋の行方。そして第２は、映画全体を貫くテーマである、特攻の生き残りとして彼がどんな役割を果たすのかということ……。

その２、板東少尉をめぐる物語

板東少尉も基本的には中西少尉と同じく単純（純粋）な軍人……。したがって１度出撃しながら自分だけが生き残ったことを負い目に感じ、最後は中西隊に合流することに。そんな板東少尉がおりなす物語は、検閲を通さずに隊員たちの手紙を出そうとしたトメが憲兵隊に発見され連行されたとき。さて、その時彼はどんな行動を……？　そしてどんな結末を……？

その３、田端少尉をめぐる物語

特攻を志願した若者として最も興味深いキャラは、「この戦争は負ける」と中西少尉の前で堂々と発言する、この田端少尉。彼がおりなす物語の第１は悪天候

や機の故障によって３度も引き返してきたため、卑怯者の烙印を押されてしまったこと。こういう日本軍特有の精神論が私は大嫌いだが、あの時代では仕方ない……？　しかし、そんな彼が迎えた悲劇的な結末とは……？

第２の物語は、出撃の日に許嫁の良子（戸田菜穂）が田端を訪れ、さらに生きて戻ってきた田端を父親の由蔵（江守徹）が訪れてきたこと。許嫁と一夜を過ごせた田端は幸せ者だが、せめて籍を入れてくれと懇願する良子とそれをダメだと拒否する由蔵との間の確執は、まさにあの時代特有の物語……。

その４、金山少尉をめぐる物語

朝鮮人として日本海軍の特攻に志願し、「天皇陛下のため」と叫んで死んでいったのが、金山少尉で、これは広く知られている物語。『ホタル』では、この金山少尉が残した遺品を遺族に届けるため、高倉健と田中裕子扮する山岡夫婦が韓国に渡る物語が涙を誘ったが、朝鮮人が日本海軍の中でどのような気持で働いていたのかという微妙なテーマは、この映画でも同じ。出撃前夜金山少尉が、最後にトメに聞いてほしいと言って歌った歌は祖国の歌『アリラン』。さて、その時の金山少尉の思いは……？

トメはなぜ「特攻の母」に……？

広島の平和記念資料館、長崎の原爆資料館そして靖国神社の遊就館を訪れると、あの戦争を風化させないための展示品がたくさんある。そして、これらを見学すれば誰だって当時に思いを馳せ、あの戦争を考えるきっかけになるはず。ところが、特攻隊は、終戦を間近に控えた一時期は「軍神」ともてはやされたが、終戦後は「特攻崩れ」と呼ばれるみじめな状況に。突然、平和と民主主義にキーワードが変わった日本では、特攻の話はタブー視さえされてきたわけだ。

もっとも今は、鹿児島県の知覧には、知覧特攻平和会館がある。しかし、これは1975（昭和50）年に建設された特攻遺品館を1987（昭和62）年に移転改築し完成させたもの。つまり、昭和20年から昭和50年までの30年間は、特攻隊の姿を後世に伝える施設は全く存在しなかったわけだ。知覧特攻平和会館が完成したのは、トメさんや生き残りの元特攻隊員そして遺族たちの献身的な努力によるもの。ト

メさんはなぜ「特攻の母」と慕われたのか、そして終戦後なぜ知覧特攻平和会館の建設に情熱を燃やし続けたのだろうか……？

今を生きる若者たちも、この知覧特攻平和会館やそのすぐ近くにあるホタル館富屋食堂、富屋旅館そして特攻平和観音像を見学するなどして、せめてそのくらいは考えてみる必要があるのでは……？

B'z の主題歌は……？

『男たちの大和／ YAMATO』の主題歌は、長渕剛の『CLOSE YOUR EYES』だったが、『俺は、君のためにこそ死ににいく』の主題歌は、B'z の『永遠の翼』。『男たちの大和／ YAMATO』と同じように、スクリーン上にエンドロールが流れ始めると同時に、B'z 特有の高音が響きわたってくる。タイトルも歌詞もよく理解できるものだが、なんせ長渕剛と違って B'z の曲は私には難しすぎる……？

もちろんこの曲は、稲葉浩志と松本孝弘の 2 人が知覧の特攻平和会館を訪れ、愛する人を守るために沖縄の海に散っていった多くの若者たちの生きザマを見据え、それに共感しながらつくったもの。そして最近の若者たちは、B'z の難しい歌でも楽々と歌っているから、B'z の曲の中では比較的わかりやすく歌いやすいこの歌は大ヒットするかも……？

主題歌から映画に興味をもつのもよし。どんな動機であれ、是非多くの若者たちにこの映画を観てもらいたいものだ。

2007（平成19）年 3 月28日記